

## 資料紹介：日輪双鳳雲牡丹文石皿片と関連資料について

篠原あかね

Material Note: The piece of stone plate with design of sun, phoenix, clouds and peonys

Akane SHINOHARA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第12号別刷

2019年3月29日

Reprinted from the

Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.12

March, 2019

## 資料紹介：日輪双鳳雲牡丹文石皿片と関連資料について

篠原あかね

Material Note: The piece of stone plate with design of sun, phoenix, clouds and peonys

Akane SHINOHARA

### I. はじめに

美術工芸分野の収蔵資料の中に「陶片」がある。およそ60箱に分けて収蔵されており、それぞれの箱に10～60個前後の「陶片」が入っている。これらは、先代の職員が遺跡で収集した出土品<sup>1)</sup>や、寄贈品など様々な形で当館に入ってきたが、中には受け入れの経緯が不明なものも少なくない。現在、資料整理のため陶磁器の悉皆調査を進めており、この「陶片」についても順次確認作業をしている。今回は悉皆調査で発見された3片の日輪双鳳雲牡丹文石皿片について報告する。本資料は、出土地および収蔵された経緯は不明であるが、中城御殿出土の石製容器と類似しており、関連する資料と考えられる<sup>2)</sup>。3片は同じ特徴であることから、一揃いの組み皿だと推測される。完品はないが、それぞれの形から皿の全体像を覗うことができる。また見込みに「日輪双鳳雲文」が施されていることから、古琉球の美術工芸品の図様を考える上でも興味深い資料である。本稿では、まず資料についての概要を述べ、次に伝世品の関連資料を紹介し比較して考察・まとめをする。

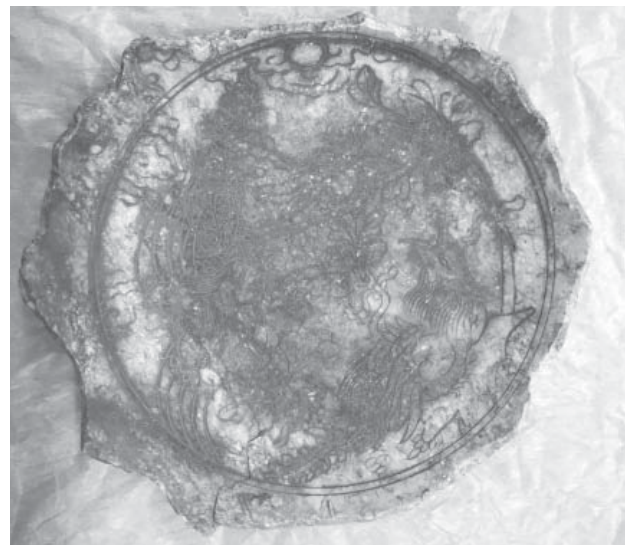
### II. 資料概要

以下で3片の日輪双鳳雲牡丹文石皿片について、大きい順にその概要を述べる。

#### 1. 石片1

円形の平らな高台がついた丸皿で、縁は大きく欠けている。法量は最大径125mm、高台径90mmで、重量は220gである。見込みを二重圈線で囲い、中に「日輪双鳳雲牡丹文」を陰刻している。向かい合う

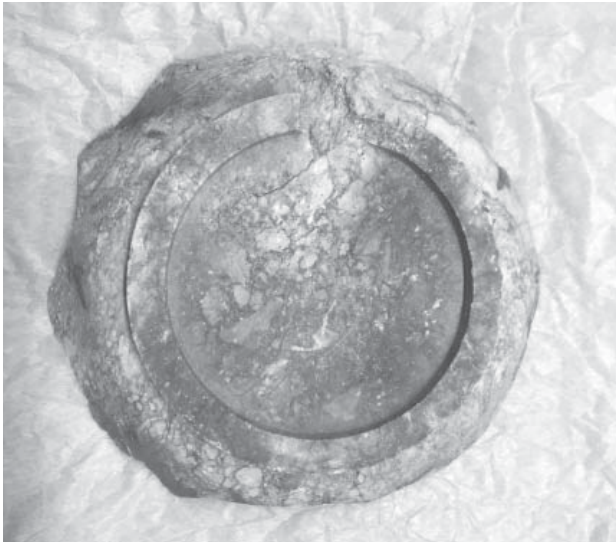
2羽の鳳凰が描かれ、間には3輪の牡丹が散らされている。鳳凰の頭上には日輪と瑞雲が描かれている。構図は左右非対称で、向かって左側の鳳凰は口に巻物を咥えている。1mmに満たない非常に精緻な描線で模様が彫られており、表面はなめらかで研磨の痕跡はほとんど見られない。描線の一部（向かって左側の鳳凰など）が金色に発色していることから、陰刻した後に金を埋め込むなど何らかの加飾を施していると考えられる。漆器の沈金のように興味深い。使用されている石材はやや赤みがかった白色で、流れ模様が見られることから流紋岩もしくは加工しやすい蠟石などの可能性が考えられる<sup>3)</sup>。また部分的に黒色を呈していることから、熱を受けて変色した可能性が考えられる。この特徴は中城御殿出土の玉製皿と一致しており、大堀皓平の報告によると、高熱を受けて変質したものだという（大堀 2018年）。中城御殿は1945年4月4日の米軍の艦砲射撃によっ



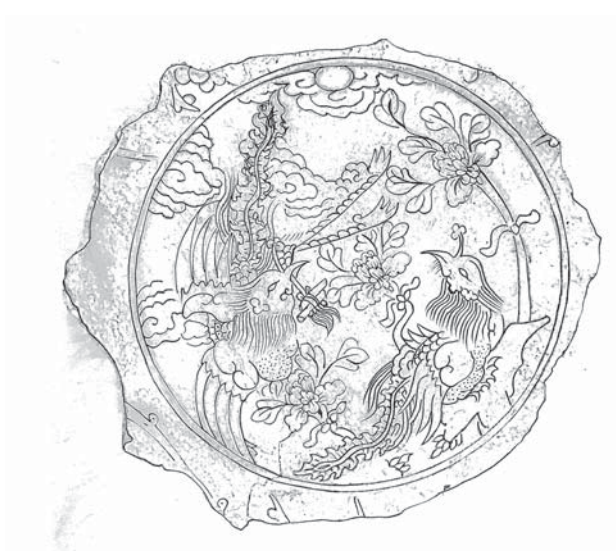
石片1画像 表

<sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan



裏



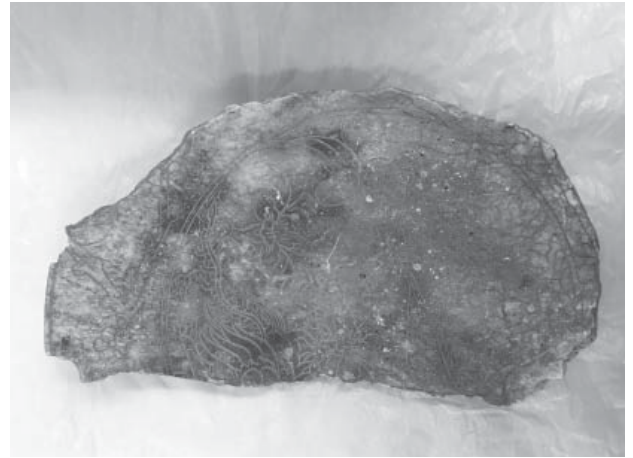
書き起こし

て炎上しているため、沖縄戦の戦禍にあっていることがわかる<sup>4</sup>。本資料も、石が変色した特徴から類似した状況にあった可能性が高い

## 2. 石片2

法量は最大径125mm、重量150gである。見込みを6割程度残して欠けているが、一部は口縁まで繋がっている。器形は底部からゆるやかに立ち上がり、口縁が外反した皿だとわかる。見込みの図様は鳳凰と牡丹、瑞雲が確認できる。見込みを二重圏線で囲っており、圏線の外側から口縁部にかけては梅枝文が描かれている。高台の作りやその他特徴は1と同じ

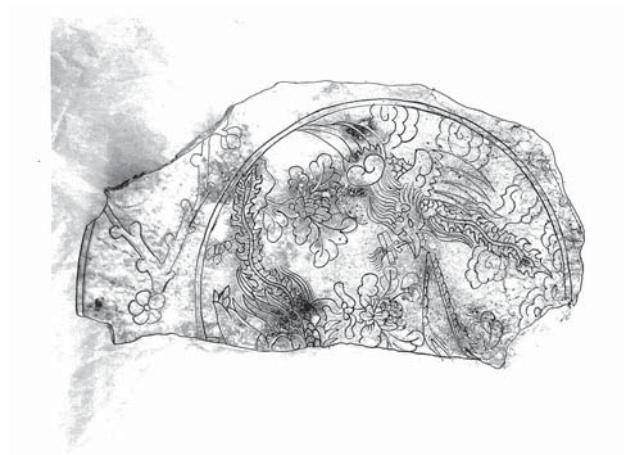
である。本資料も一部が黒く変色しており、部分的に赤みが強く橙色に発色している。石材の特徴なのか、変質したのか現時点では判断できない。



石片2画像 表



裏

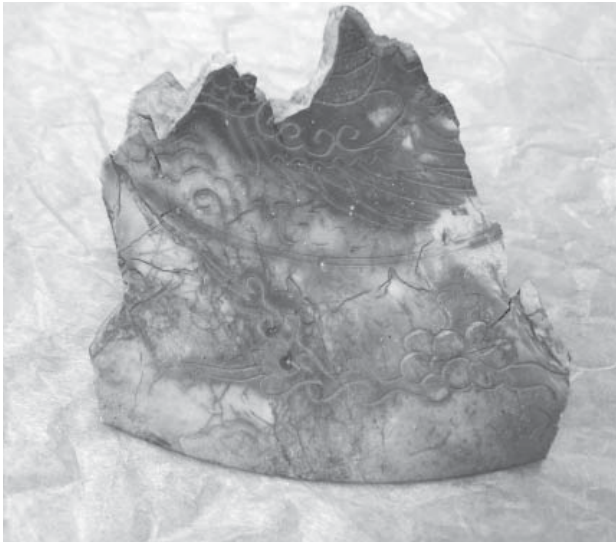


書き起こし



### 3. 石片3

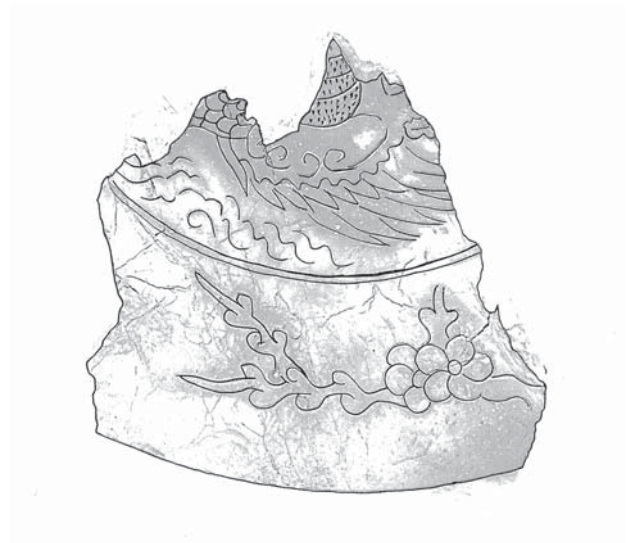
最大径63mm、重量50gである。口縁部の欠片で、梅枝文と見込みを囲う二重圏線の一部、瑞雲が確認できる。欠けている模様は、1および2の鳳凰の羽根とは一致しなかった。しかし描写が非常に似ているため、同じ鳳凰の図様である可能性が考えられる。その他の特徴は1および2と共通している。



石片3画像 表



石片3画像 裏



書き起こし

### III. 関連資料

先に述べたように3片の石皿片（以下、本資料）と同種の石片が中城御殿から出土している（埋蔵文化財センター 2011年）。中城御殿から出土した石製容器は全29点得られており、器種は角皿、丸皿、小杯に分けられている。丸皿は特徴が一致しているため、本資料と同一と考えられる。本資料は中城御殿の出土品では分かり得なかった器の図様が確認できる点で貴重である。本資料のような石製皿は類例が非常に少なく、管見の限り大和においてもほとんど作例がない。沖縄県内で出土した石（玉）製品45点については2018年に大堀が報告しており、全時代的に石（玉）製品の出土が見られる点で、沖縄は例外的だという<sup>5</sup>。全容については割愛するが、出土した玉製品は首里城跡や中城御殿跡から出ているため、特別な器物だったことが伺える。製作地は明らかで無いが、大堀は中城御殿出土の玉製皿について国産陶磁器に施される文様に近く、中国では見られない角皿があることから中国で作られたものではないと述べている。さらに鹿児島に類例があることから、中国から輸入された玉器を手本に、琉球国内で自家用や贈答用として製作されたと推測している<sup>6</sup>。はたしてこれほど精密な石製品を作る技術が琉球にあったのだろうか。もし仮に琉球産だとすれば、貝摺奉行所で制作されたと考えられるが、貝摺奉行所の中で本作のような石製品を作っていたという記録は見つけられなかった。類例がないことから、

仮に琉球で製作されていたならば、その技術はごく限られた時期にのみあったといえることができる。製作地について考察するため、以下で琉球における伝世品の石製品と比較してみたい。

琉球においては、漆器の東道盆<sup>7</sup>に内蔵する容器として石皿を使用する作例が2例知られている。朱漆山水楼阁人物箔絵丸型東道盆（沖縄県立博物館・美術館 蔵）（図1）と朱漆山水人物箔絵東道盆（浦添市美術館 蔵）（図6）である。2例は漆器として研究されることはあっても、石皿については深く言及されることがなかった。以下で簡単に概要を述べ、比較と考察を試みたい。

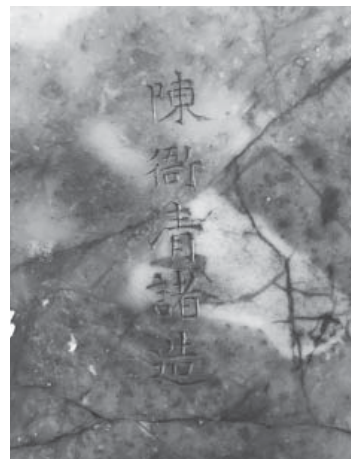


図1 朱漆山水楼阁人物箔絵丸型東道盆  
沖縄県立博物館・美術館 蔵  
高さ290mm、径485mm 県指定有形文化財



図2 朱漆山水楼阁人物箔絵丸型東道盆の石皿

円形、印籠蓋造りで4本の猫足がついている。中には石製の皿が9枚収められており、口径234mmの円形皿を中心に扇型皿8枚を並べている。中央の丸皿は見込みが二重圈線で囲われ、中に麒麟を陰刻している。（図2）麒麟の周辺は瑞雲で満たされ、麒麟の口から立ち上る煙の上に箱が描かれている。箱の左下には「祥瑞王麒麟」と文字が彫られている。麒麟は鳳凰と同じく四獣のひとつであり、麒麟の出現は世に良いことが起きる瑞兆と見なされたため、吉祥的な図様として表されていることがわかる。見込みから口縁部にかけては梅枝文を散らしている。表現方法は異なるものの、石皿片と同じ図様であることが興味深い。裏は丸く平らな高台がつき、中央に縦書きで「陳衛清諸造」と彫られており、製作者の名前と考えられる<sup>8</sup>。（図3）扇形皿は8枚それぞれの見込みに宝尽くしの異なる図様が彫られている。見込みと口縁部の境目を線引きし、口縁部との間には唐草文を描いている。裏面には靈芝を描き、高台は四方にL字形の足をつける。（図4、5）赤い石材が使用されており、寿山石や蟬石の一種なのではないかと考えられる。石材については破壊分析を



「陳衛清諸造」

図3 石皿の裏の銘

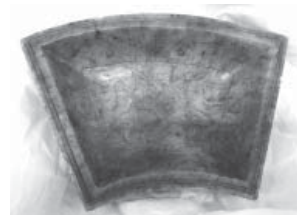


図4 扇形皿 表



図5 扇形皿 裏

高さ300mm、径495mm



しないと明確にならないが、このような石は沖縄県内で採取することができないため、県外のものだと考えられる<sup>9</sup>。また裏の記銘「陳衛清諸造」は「陳衛清」が作者の名前だとすると、琉球人の名前ではないため、中国人の手によるものと考えられる。材料の石が中国で取れることから、本作は中国で作られて、琉球へ輸入されたと考える方が自然なのではないだろうか<sup>10</sup>。



図6 朱漆山水人物箔絵東道盆 浦添市美術館 蔵

漆器は先に挙げた当館所蔵品と同じ様式である。浦添市の文化財に指定される優品であるが、今回は内蔵される石皿についてのみ述べることにする。

中央の丸皿は口径225mm、高さ32mmで見込みに帯状の二重線で囲われ、中に龍を陰刻している。(図7) 龍は四爪で宝珠を右手に正面を向く構図で、龍の周りには瑞雲が立ちこめている。見込みを囲む帯の中と、帯の外側にはそれぞれ梅枝文が描かれており、木の幹まで表現されている箇所も確認できる。また



図7 朱漆山水人物箔絵東道盆の石皿

平らな口縁部にも梅と笹の葉が陰刻されており、模様の隙間を埋めるように細かい格子状に線を描いている。本作は保存状態が良く、描線に金が埋められていることが確認できた。龍の髭や角、宝珠など部分的には黒い色を差しており、陰刻線を彩る技法があったことがうかがえる。裏は帯状の高台が付き、口縁部から底部にかけて梅が描かれている。(図9) 使用される石材は部分的にやや褐色がかった薄緑色で、質感は当館所蔵品の石皿と近い印象を受けた。8枚の扇形皿は中央の丸皿と同じモチーフで、見込みに水を吐く龍と瑞雲、周辺に梅枝文が描かれる。8枚全て共通して、金で彩られており、龍が吐く水と瑞雲、梅の花が黒色になっている。裏はLに近いハート型の高台が4つ付き、口縁部にかけて梅の木が描かれる。

#### IV. まとめと展望

東道盆の石製皿と今回報告する石皿片は、それぞれ使用される石材の種類が異なるように見受けられた。模様の彫りは東道盆の石皿よりも石皿片や中城御殿出土品の方が繊細な線が彫られている。非常にキメの細かい石で、削り痕もほとんど確認できない。どちらも沖縄県内で採掘できる石材ではなく、外国産である可能性が指摘できる。

2基の東道盆(漆器)は18～19世紀に琉球で製作されたと考えられている。内蔵される石皿も、漆器に合わせて(もしくは石皿に合わせて漆器が)同時期に製作されたと考えるのが自然だろう。また当館所蔵品の石皿に刻まれた銘「陳衛清諸造」(図3)から琉球ではなく中国で製作された可能性が高いと推測される。

元々玉製品を作る習慣がある中国においては、石製皿などを作る技術があったと考えられる。

また描かれる模様は東道盆の石製皿と石皿片ともに、見込みに瑞雲に囲まれる四獣を描き、その周りに梅枝文を描くという組み合わせが一致している。特に浦添市美術館所蔵品と石皿片の梅枝文は枝と蕾のふっくらとした表現や、口縁部から見込みに向かって枝が伸びる特徴的な描き方が共通している。(図10、11)

石皿片に描かれている日輪双鳳雲文については安里進が興味深い指摘をしている。安里は琉球王国時

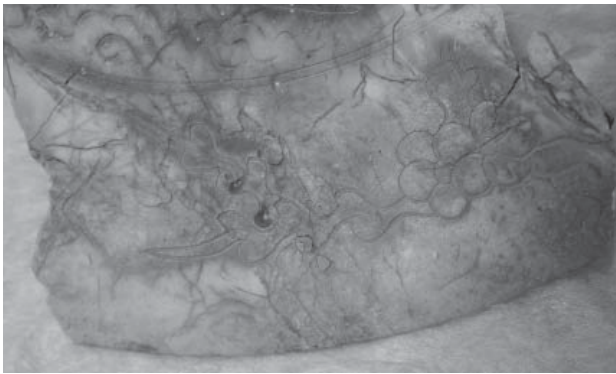


図10 石皿片3部分



図11 朱漆山水人物箔絵東道盆（浦添美術館蔵）  
石皿部分

代の石碑に表現される文様変遷を研究し、日輪双鳳雲文は16世紀に王府・王家にかかわる文様として石碑や漆器などに盛んに用いられたと述べている。さらに、島津侵攻を契機に鳳凰文と日輪文の組み合わせはなくなり、18世紀初葉には宝珠双龍雲文が登場するという<sup>10</sup>。また例に挙げている通り、現在知られている中で最も古い15世紀の作例とされる漆器の丸櫃<sup>11</sup>にも日輪双鳳雲文が沈金で描かれており、この模様が古琉球時代の代表的な模様表現であったことが指摘される。

模様表現に限って言えば、石皿片は16～17世紀の石碑や漆器の文様と類似している。また東道盆などの類似品から制作地は琉球や大和よりも中国の可能性が高いのではないだろうか。

今回は発見された石皿の報告と、関連した石製品との比較を通して産地の推測をした。古琉球時代の王権を象徴するといわれている日輪双鳳雲文の新たな作例として注目される。今後はより詳細な研究を進め、使用方法などを明らかにしたい。また石皿が発見された箱に収蔵されている陶片を詳しく調べて出土地の推測を試みたいと思う。

## 謝辞

本報告をするにあたり、沖縄県立芸術大学の森達也先生にご教示いただきました。感謝申し上げます。また資料閲覧にご協力くださいました浦添市美術館の金城聡子氏、仲嶺久里子氏にも御礼申し上げます。

## 注釈

- <sup>1</sup> 宮城篤正「壺川窯出土陶片調査略述」琉球政府立博物館『琉球政府立博物館報No.4』1971年
- <sup>2</sup> 沖縄県立埋蔵文化財センター「中城御殿跡―県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)―」2011年、226頁
- <sup>3</sup> 前掲1『中城御殿跡発掘調査報告書』では類似の皿について「白色の流紋岩質の石材」としている。
- <sup>4</sup> 大堀皓平「首里城跡周辺の遺跡より出土する玉器」沖縄考古学会『沖縄考古学会2018年度研究発表会資料集 古都首里を掘る』2018年
- <sup>5</sup> 前掲3 91頁
- <sup>6</sup> 前掲3 95頁
- <sup>7</sup> 東道盆とは蓋と脚が付いた盆で、客をもてなす食器として使用された。盆の中を仕切るため小皿が内蔵されている場合が多く、漆器や中国製の磁器が使用される。
- <sup>8</sup> 盆の見込みは黒漆塗りで、中央に「李存榮造」と朱書きされている。漆器を製作した人物の名前と考えられているが、今回は石皿について触れることとし、漆器の作者については別の機会に考察したい。
- <sup>9</sup> 当館の地学担当学芸員、宇佐美賢氏のご教示による
- <sup>10</sup> 18～19世紀の東道盆には磁器製の小皿が内蔵される作例が複数ある。磁器は琉球国内で生産されていないため、中国で作られていた。琉球製の漆器に中国製の皿を組み合わせる例が多くあることから、皿は中国で作られたと考えられる。
- <sup>11</sup> 安里進『考古学からみた琉球史 下』1991年、ひるぎ社 58頁
- <sup>11</sup> 久米島の君南風家に伝わる「緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃」（個人蔵）